〈著者からひとこと〉

『〈焼跡〉の戦後空間論』

逆井聡人著
青弓社　二〇一八年八月

一九四五年八月のアジア・太平洋戦争終結から、来年で七十五年が経とうとしています。そして、この時代を示す言葉として「戦後」という語が使われてきました。しかし、この間には様々なことが起こっています。天皇制を暗黙裡に支持することで使われる元号も、「昭和」から「平成」へ、そしてまた新しい元号へと移り変わり、支配政党である自民党も変幻自在にその形を変えてきました。自然災害も幾度と重なり、経済状況もめまぐるしく変わっています。人々の暮らしに目を向ければ、「一億総中流」という幻想は吹き飛び、格差社会が広がってこれまで当たり前とされてきた生き方が様変わりしてきました。これだけ変化のある七十五年間を、それでもなお「戦後」という一言で言い表そうとするのはなぜでしょうか。あるいは、このように聞き直すこともできるかもしれません。「戦後」という言葉で包み込むことで何を見ないようにしているのでしょうか、と。

本書は、敗戦後のアメリカによる占領下の日本における都市空間の表象を扱ったものです。特にこの敗戦直後という時代を語る際に頻繁に登場する「焼跡」・「闇市」という空間に焦点をあてて論じました。これまで長い間「焼跡」・「闇市」は、「戦後日本」の始まりの空間として参照されてきました。しかしながらよくよく考えてみると、どちらも一九四五年八月十五日に突如として現れた空間ではありません。「焼跡」は米軍の戦略爆撃の被害の跡ですし、「闇市」は一九三九年に始まる統制経済の副産物です。この空間を見れば見るほど、それ以前からの断絶よりも、連続性の方が見えてきます。しかし、当時から現在までのメディア言説や批評言説を見渡してみると、この空間の連続性への言及は周到に回避されてきたことが分かります。むしろ、こうした場を「戦後日本」の「グラウンド・ゼロ」として読み換えるために、この連続性が見えないような偽装が長い間施されてきたと言えるでしょう。では、その連続性は何を示してしまうのか。それは、日本が「戦後」と呼ばれる時代の間、絶え間なく戦争に関わってきたという事実です。したがって本書は、文学や映画、批評言説を対象にしながら「戦後日本」と引き続く戦争（＝冷戦）との関係を考察しました。お手にとっていただければ幸いです。

（逆井聡人）

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja